

<エッセイ : 小特集「世界各地の『研究所』 新たな日本研究へ」>東京大学史料編纂所と日文研

著者	榎本 渉
雑誌名	日文研
巻	52
ページ	52-55
発行年	2014-03-31
URL	http://doi.org/10.15055/00004090

の共同企画もあり、筆者はこちらにも頻繁に招聘されている。研究者は相互に知人同士だが、組織上は縦割り乱立の傾向は否めない。パリですでにこの錯綜状態だが、フランスの日本研究に関係する研究者網については、*Bulletin de la Société française des Études japonaises* (SFEJ) に名簿がある。なお、アルザスの Centre européen des études japonaises en Alsace (CEEJA) がストラスブール大学とも密接な関係をもちつつ、英語圏や独語圏を含めた欧州の日本研究網において重要な役割を果たしている。また Maison franco-japonaise à Tokyo, Institut Franco-japonais à Kansai などとの協力関係も、組織水準ではなお未開拓だが、日文研として将来深めてゆく可能性が残されているだろう。大学の日本関係の教育・研究については、稿を改めることとしたい。

(国際日本文化研究センター教授)

東京大学史料編纂所と日文研

榎 本 渉

東京大学には附置研究所として史料編纂所がある。前近代の日本史研究にたずさわる者ならば、名前を聞いたことのない者はおよそ存在しないほど、これまで歴史研究に大きな役割を果たしてきた研究機関である。現在の史料編纂所に直接つながる前身組織は、一八六九年に明治天皇の詔を受けて維新政府が設置した史料編輯国史校正局である(以下歴代の前身機関も併せ

て「史料編纂所」と便宜表記する）。東京大学は一八七七年に設立され、史料編纂所は一八八八年に内閣から大学に所属を変更したから、史料編纂所は大学本体よりも古い歴史を有する組織ということになる。

このたび私は、この史料編纂所と日文研について一文を物せよとの指令を受けた。日本史研究者でありかつ東京大学出身であるというところからの人選だろうが、私は二ヶ月間日本学術振興会特別研究員（PD）としてお世話になった（採用直後に他所に転任）以外に同機関に属したことはなく、内情を知悉しているわけではない。したがって私が史料編纂所について述べられるのは、外部の人間としての立場に過ぎない点は断っておきたい。

一般のイメージでは、史料編纂所と日文研は対極的な存在だろう。史料編纂所の当初の使命は日本国の正史（国家の歴史書）の続編編纂だったが、指導的立場にあった重野安繹は清朝考証学の薰陶を受けた漢学者である。彼は史料の収集と厳密な考証を宗とし、久米邦武らとともに実証史学の立場を堅持して、一部のファナティックな国学者や政治運動家たちから歴史学の中立性を守った。史料編纂所は一八九五年を以て編年史料集（『大日本史料』）の編纂に方針を改める。これは一面では正史という国定の「物語」の放棄でもあるが、これによってその実証主義的立場は確定した。昭和の皇国史観やマルクシズム歴史学の台頭の中で、所員個人としてはそれらに傾倒する者がいても、研究所としては史料集編纂を責務とし、特定の政治的立場に与する活動は行なわなかった。史料編纂所のこのような禁欲的な姿勢が、軍部の台頭やGHQ占領の時代をくぐりぬけ、一世紀以上の編纂事業を可能にできたのだろう。

ただし久米の論文「神道は祭天の古俗」（一八九一年）に多くの批判が浴びせられたことから分かるように、厳格な実証史学が必ずしも江湖で全面的な歓迎を受けたわけではない。そ

もそも史料編纂所の第一の使命は歴史の素材である史料の整理・公刊だったが、社会一般で言えば難解な史料集や煩瑣な実証などより、日本の歩みを大きな見地から分かりやすく示す見取り図としての歴史（または史論・歴史哲学）の需要の方が大きかった。これはどちらが優れているかという問題ではなく、一般に歴史に求められる二つの側面である。そして日文研では創設以来、後者Ⅱ見取り図としての歴史が、一定の位置を占めてきた。「学際的研究」「国際協力」を主要コンセプトに掲げ、狭義の日本史学者に限らない国内外の哲学者や文化論者が議論に参加したことが大きな要因だろうが、実証史学の「ぶれない」研究姿勢のみではすくいきれない社会の要求や国際的動向に迅速に応じられる柔軟性も期待できた。三年間で成果をまとめる共同研究という形態も、研究に一定の柔軟性を担保すべく設定されたものだろう。これはまったく「実証」的な話ではないが、おそらく日文研は、実証史学のみでは満たされない知的需要を引き受ける役割も果たしてきたのだと思う。

ただし「学際的研究」「国際協力」に類するコンセプトは、文科省の肝煎りもあり、今では日文研に限らず全国至るところで聞かれるようになった。かの史料編纂所も、今では史料収集・編纂の使命は堅持しつつ、より間口の広い研究組織を志向している。たとえば画像史料解析センター・前近代日本史情報国際センターなどを設けて対象とする史料の範囲を広げ、海外資料調査や国際シンポジウムも連年行なわれるようになって久しく、学際性・国際性を獲得しつつある。国内外の研究者の受け入れや共同研究にも積極的で、私も個人として、去年度は臨済宗夢窓派、今年度は中世医書の調査をテーマに共同研究を申請し、受け入れていただいた。恵まれた蔵書というアドバンテージの中で一世紀以上不変の体制に安住しているわけでは決してない。具体的な成案はないので抽象的な物言いしかできないが、日文研も今や「学際的研

究」「国際協力」という題目だけでは独自性を示すことが難しくなりつつあるように見える。その面での先駆者としての地位は重宝すべきだとしても、それに加えて研究の質や広がりを変える何らかの自己変革も必要となってくるかもしれない。

（国際日本文化研究センター准教授）

日文研の中庭で想うこと

井 上 章 一

まだ、若いころ、二〇歳台なかばから三〇すぎまで、私は京大の人文研につとめていた。日本部の助手というかっこうで、七年間給与をもらっている。一九八〇年から八七年までのあいだである。

ふるさとの悪口もどうかと思うが、オフィスの見てくれはひどかった。打ちっぱなしのコンクリートで、全体はあらっぽくしあげられている。なのに、古風なアーチをあしらいい、建物は愛想をふりまいていた。現代的な無骨さをあらわしたいのか、それとも過去へのロマンにひたりたいのか。なにをしめしたいのが、わからない。筋のとおらないデザインの建物であった。導線のあるばいも、ぐあいがいいとは、とうてい言いきれない。平面計画もおそまつな、まとまりのない建物であったと思う。